

令和五年度

岡山白陵中学校入学試験問題

国

語

受験 番号	
----------	--

注
意

- 一、時間は五〇分で一〇〇点満点です。
- 二、問題用紙と解答用紙の両方に受験番号を記入しなさい。
- 三、開始の合図があつたら、まず問題が一ページから二三ページまで、順になっているかどうかを確かめなさい。
- 四、解答は解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 五、字数制限のあるものについては、句読点も一字に数えます。

次の各問いに答えなさい。

問 1 次の①～⑩にある――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 野菜をシュツカする農家にとって、異常気象は悩みの種だ。
- ② 若手がタイトウしてきたことが、組織全体の活性化につながった。
- ③ 最近では、撮った写真をゲンゾウする機会も少なくなった。
- ④ ウクライナ情勢は、非常にむずかしいキョクメンに差しかかった。
- ⑤ 悲願の全国大会出場を果たすことができ、私はカンムリヨウの思いだ。
- ⑥ イギリスで気温が四十度を超えたのは、シジョウハツのことだ。
- ⑦ コロンビアで豪雨による大規模な土石流が発生し、カオク等が破壊された。
- ⑧ カイサツとは、元は駅員が切符を確認して一部を鋏で切り取ることを指した。
- ⑨ 海外で働く友人が久々に帰国したので、皆で集まる機会をモウけることにした。
- ⑩ 久々の大会だったが、自分の練習の成果を思うゾンブン発揮することができた。

問2

次の①～③の文章を読んで、そこから読み取れることとして正しいものを後のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

① 今では世間一般に「唐揚げ」と表記されている料理は、新聞では十数年前まで「から揚げ」または「空揚げ」の表記しか認められておらず、テレビでも「唐揚げ」という表記を見ることはそう多くなかった。

ア 現在、新聞で「空揚げ」という表記を見かけたとしても、それは誤りではない。

イ 十数年以上前には、「唐揚げ」という表記を世間で見かけることはなかった。

ウ 「から揚げ」という表記は、この十数年の間で広く世間一般に定着した。

エ テレビの字幕では現在、「から揚げ」または「空揚げ」の表記を多く用いている。

② 秋に鳴く虫といえば、スズムシやマツムシが思い浮かぶが、ある学者は江戸時代の文献に、「松むしは色が黒く、鈴むしは赤い」という内容の記述を見つけ、他の文献も調べた上で二者は今と当時では逆の呼び方であったと結論づけた。

ア ある学者は、マツムシは黒い虫ではないので、江戸時代の文献には誤った記述があると考えた。

イ ある学者は、江戸時代には虫の鳴き声に関係なく、どんな色かで呼び方を決めていたと考えた。

ウ ある学者は、江戸時代に「松むし」と呼ばれていた虫は、現在のスズムシのことだと考えた。

エ ある学者は、秋に鳴く虫の呼び方は、江戸時代と現在とは基本的に異なっていると考えた。

© 私の伯母には娘が一人いて、共に料理店で働いており、私の母もそこで働いている。伯母には兄がおり、会社の経営者であったが、数年前に息子にその座を譲って、今は私の伯母の働く料理店で週末だけ働いている。

- ア 私のおいは会社を経営している。
- イ 私の伯母には娘と息子がいる。
- ウ 私は私のいとこと共に仕事をしている。
- エ 私の伯父は彼のめいと共に働いている。

問3 次のア～エの中で、慣用句の使い方が正しいもの一つを選び、記号で答えなさい。

- ア 小学生の息子は、明日が楽しみにしていた遠足なので浮き足立っている。
- イ 彼女は本音を言わず愛想笑ばかりしているので、気の置けない人だ。
- ウ 彼の手助けはやめておこう。「情けは人のためならず」と言うからね。
- エ 彼女ほど実績ある人がまだ係長だなんて、本当に役不足もいいところだ。

このページに問題はありません。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学校二年生の「章也」の両親は、章也が生まれる直前に転居したが、前の家の場所がわかった章也は、姉の「翔子」と「一緒に」そこを訪れてみることにした。以下は、そこから帰っている途中の場面である。

「もっとそっと持たないと、タマネギ傷んじゃうでしょ」

「平気だよ、新鮮野菜なんだから」

「関係ないじゃん」

新タマネギが詰まったビニール袋を振り回しながら、章也はバス停に向かって歩いていった。歩道のコンクリートの隙間から雑草が顔を出し、風に葉を揺らしている。空気にはほんの少し湿り気がある。

「あたし、落っこちて死んだんだね」

顔を上に向け、翔子が呟いた。

空は曇っているが、姉の顔はどこか晴れ晴れとしている。

章也は黙って頷き、ぶんとビニール袋を一回転させた。

近所の人から聞いたのだけど前置きをして、瀬下は話してくれた。

姉は二階の、いまは瀬下が寝室として使っているあの部屋のベランダから落ちたのだという。日曜日で、父も母も家にいたのだが、ちよつと目を離れた隙に、自分で窓を開けてベランダに出てしまったらしい。

——窓の鍵を、きつと掛け忘れていたんだね。

何をしようとしたのかはわからない。目的なんてべつになかったのかもしれない。一歳半の姉は、ベランダにあつ

たゴミの袋からポリバケツによじ登り、柵の外へ身を乗り出した。ちょうどそのとき、母が階段を上がってきて部屋を覗いたのだが、

——あつと思つたときは……もう、遅かつたそうだと。

雨が降つたり止んだりで、そのときアルミの柵は濡れていた。身体を支えていた両手を柵の上で滑らせ、姉は母の目の前で落ちた。玄関の軒庇で一度頭を打ち、そのままポーチに全身が叩きつけられた。すぐに救急車が呼ばれたが、意識は戻らず、翌日の夜、息を引き取つた。

——その同じ家に赤ん坊を迎え入れるのが、どうしても怖かつたらしい。引越していくとき、お母さんが、そう話していたそうだよ。

ここに赤ん坊がいたら、また同じことが起きる。そんなふうにしたのだろうか。章也が訊ねると、瀬下は曖昧に首を振つた。

——きつと、そんなふうには、言葉にできるものじゃないんだよ。

リビングの椅子に座つた瀬下は、レースのカーテン越しに畑を眺めた。そうしてしばらく黙っていたが、やがて半分ほど振り返り、壁を見つめて言った。

——生まれてくるきみのことを、それだけ大事に思っていたんだろうね。

すぐに頷くことはできなかった。瀬下の顔から目をそらしながら章也は、
① いま暮らしている部屋がアパートの一階にあることについて、ぼんやりと考へた。そして、あれは幼稚園の年少のときだったか、夏の雨降りの日に、母からひどく叱られたことを思い出した。

その日は降り込んだ雨でアパートの外廊下がびちよびちよに濡れていて、章也はそこをビーチサンダルで走っていた。急ブレーキをかけると、水のせいでサンダルがスケート靴のように滑り、それが面白かつた。右へ左へ、章也は走り、止まり、つるつる滑って遊んだ。息を切らして何度もやっていたら、急にシャツの背中を強い力で掴まれた。

びっくりして振り返ると、見たこともないほど怖い顔をした母が立っていた。やめなさいと、ほとんど叫ぶように、母は言った。叱られたことよりも、その声と顔が怖くて、章也は泣き出した。玄関に引つ張り込まれてからも、自分では泣きやむことができず、どうしていいのかもわからず、母の身体にしがみつくようにして、いつまでも泣いていた。母は章也の肩と頭に手を載せ、額同士をくっつけたまま、お願いだから危ないことはしないでと、同じ言葉を何度も繰り返した。

——そろそろ、帰ったほうがいい。

瀬下はビニール袋いっぱい新タマネギを詰め、章也に持たせてくれた。

——雨が降ってくるからね。

「お母さんに何て言うの？ そのタマネギのこと」

ぶらぶらと隣を歩きながら、翔子が顎の先でビニール袋を示す。その仕草で前髪が揺れ、白い額がちらっと見えた。② これまではなかった小さな傷痕が、そこにはあった。

「帰りながら考える」

「嘘の話つくるの得意だもんね」

「得意だよ」

バス停までは、まだ距離があった。タマネギの言い訳をあれこれ考えていたら、翔子が前を向いたまま変なことを訊いてきた。

「章也……：……ほんととは今日、何しに行ったの？」

「だから、③ 子供部屋の数をたしかめようと思ったんだよ。このまえデパート行った帰りに、家の場所がわかったか」

「それはそうなんだろうけどさ、あんたにしては思いきったことやったじゃん」

翔子はそこで言葉を切った。答えを待っているようだったが、章也が何も言わずに黙っていると、珍めづらしく優やさしい声でつぶけた。

「(注2)明日のことが、関係ある？」

迷ったが、章也は頷いた。

「なんか、怖かった」

訊ね返すように、姉は小首をかしげる。

「行くのが怖かった」

また、みんな姉の話ばかりするのだろう。自分は座布団ざぶたんの上で④透明とうめいになつてしまふのだろう。そのことに、もう耐えられないのではないか。そんな気がしたのだ。だから今日、少ない小遣いこづかでバスに乗り、子供部屋(注3)の数を確認しに行った。その数が一つでも二つでもよかった。どちらにしても、それを確認することさえできれば、自分はもう透明にならないでいられる。そんなふう思った。

「でも、わかんない。はっきりそう思ったわけじゃないんだ。よくわかんない」

「自分のことなの？」

「うん、わかんない」

バス停に着くと、誰も座だれっていないベンチに並んで腰こしかけ、バスを待った。空では雲が厚くなり、歩道に映る標識の影かげがほとんど見えない。

「……この風かな」

A 風が通りすぎたとき、章也は訊いた。

「さあ、どうなんだろう」

「いまのじゃないのかな」

「わかんないよ」

少女風という名前を、瀬下は別れ際に教えてくれた。雨がやってくるとき、降る前にそっと教えてくれる風を、そう呼ぶらしい。

「わかんないや、意味ないね」

章也が笑うと、姉も笑った。その肩口にぽつんとバスが見えた。来たよ、と章也が言う前に、ねえ、と姉が口をひらいた。

「⑤ あたしも、乗っていい？」

ほんの少し頬笑みながら、姉は章也の顔を見つめていた。章也は何か言葉を返そうとしたが、急に涙がこみ上げ、
B 歯を食いしばり、涙をのどの奥に押し戻してから、やっと答えた。

「知らないよ、そんなの」

ぽつ、と最初のしずくが手の甲にぶつかった。雨は本当に降ってきた。アスファルトの苦いにおいがあたりをたちこめ、空に顔を向けると、透明な雨滴が顔のすぐ脇をかすめていった。二つ、三つ、四つ、やわらかいしずくが膝と頬につづげざまに落ちてくる。

「章也。雨が降るときの風、いつかわかるようになるといいね」

「傘、持ってくかどうか迷わないですむもんね」

雲の手前を、水切りの石みたいな動きで鳥が飛んでいく。グジュグジュピー、グジュピーと高い鳴き声が遠ざかっていく。

「明日……平気そう？」

章也は少し考えてから頷いた。

「たぶんね」

「これからは？」

章也は答えなかった。大きめの雨粒あまつぶが、右目の内側のへりに落ちて、C鼻の脇を伝った。くすぐったいので手の甲むねで拭おうとしたが、思い直して中指ではじき飛ばした。ぱっと細かい水滴すいてきが散って消え、遠くからバスのエンジン音が聞こえてきた。

「章也」

「うん」

「なんか、嘘(注5)の話してよ」

「いいよ」

エンジン音はだんだんと近づいてくる。

「あのね、ある畑にアスパラガスがたくさん生えててね、畑をやっておじいさんが、それをとって食べようと思っただ。ぜんぶはさみ鋏はさみでとって食べたつもりだったんだけど、一つだけ忘れられてるやつがあつてね。でもそれはずつと大きくならないアスパラガスでね——」

姉からわざと顔をそむけ、だんだんと大きくなってくるバスの音を耳の後ろに聞きながら喋しゃべった。もし話が途切とぎれ、そのときに、⑥先をせかす姉の声がしなかったらと思うと、どうしてもやめることができなかつた。鼻の奥おくがちらちりと痛くなってくるのを感じながら、でたらめに話をつづけた。バスはもうすぐそこまで迫せまっていた。

(道尾秀介『やさしい風の道』による)

- (注1) 瀬下——章也の両親が住んでいた家に現在住んでいる男性。タマネギやアスパラガスを作ってくらしている。
- (注2) 明日のこと——明日は「十回目の翔子の法要の日」である。法要とは、死者をとむらりするための行事。
- (注3) 子供部屋の数を確認しに行った——子供部屋は結局一つであった。
- (注4) 水切り——水面をはずんで飛ぶように石を投げる遊び。
- (注5) 嘘の話——章也はふだんから翔子にでたらめな話をよくしている。

問1

A

C

 にあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア ぐっと イ つつと ウ はつと エ ふつと

問2 ———線部①「いま暮らしている部屋がアパートの一階にあることについて、ぼんやりと考えた」とありますが、どのようなことを考えたのですか。わかりやすく説明しなさい。

問3

――線部②「これまではなかった小さな傷痕が、そこにはあった」とありますが、この部分が表していることとして最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 章也は、傷痕があることに気づかないほど、実は姉に対して無関心だったこと。

イ 翔子が気にして隠^{かく}していた傷があらわになるほど、そのときの風が強くふいたこと。

ウ 章也が翔子についての新たな知識を得たために、姉の顔についてのイメージが変化していること。

エ 翔子は、真実を知ったことで、顔の傷痕とたとえられるほどの大きな精神的なショックを受けていること。

オ 章也は、タマネギの袋を振り回して翔子に傷を負わせたことに気づかないほど、心がたかぶっていること。

問4

――線部③「子供部屋の数をたしかめようと思ったんだよ」とありますが、章也はたしかめることで、どういうことがわかるかもしれないと考えていましたか。最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 子供部屋が一つなら、両親は自分を姉と相部屋にする気であった。

イ 子供部屋が一つなら、両親には二番目の子を作る気がなかった。

ウ 子供部屋が一つなら、両親は章也に部屋を用意する気がなかった。

エ 子供部屋が二つなら、両親には結構な規模の家を持てる収入があった。

オ 子供部屋が二つなら、両親は今の家に転居せずにすんだ。

問5

――線部④「透明になってしまおう」とありますが、これはどのような気持ちになることをたとえているのですか。わかりやすく説明しなさい。

問6

「瀬下」は、この作品においてどのような役割を持っていますか。最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 章也たちをあたたかく迎えてくれただけでなく、帰りの時間を心配してくれるなど、親代わりとして今後の人生で心のよりどころとなる存在。

イ 章也が親に大事にされていたことを気づかせることで、章也のわだかまりが少し消え、次の段階に進ませるきっかけになる存在。

ウ 章也は大事に思われていないなど、章也のひとり合点であることを知らせることで、成長途中の章也に、乗りこえるべき大人としてえがかれている存在。

エ 親戚たちには良い感情を持っておらず、社会に背を向けている章也に、全部の大人が捨てたものなのではないと目を開かせる存在。

オ ずっと知りえなかった姉についての秘密を章也に知らせる人物として重苦しくえがかれ、章也の将来にわたって暗くのしかかる存在。

問7

——線部⑤「あたしも、乗っていい？」とありますが、姉のこの発言はストーリーの展開上どういうことを意味していますか。最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 翔子がいちいち許可を仰がねばならないほど、章也が姉に対して優位な立場に立っていること。
- イ 翔子がバス代を気にせねばならぬほど、章也がお金を使っているかもしれないこと。
- ウ 章也は姉と帰りたくないのかもしれないと、無言のうちに察した翔子の勘の良さ。
- エ 章也がひどくショックを受けているのに気づき、一人にしてあげようという翔子の思いやり。
- オ 章也は、想像してまで翔子と一緒にいることを必要としない方向へ歩み出そうとしていること。

問8

——線部⑥「先をせかす姉の声がしなかったらと思うと、どうしてもやめることができなかった」とありますが、このときの章也を説明したものとして最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 翔子がバスに乗らないことは理解したものの、一人でバスに乗るのが不安なので、せめてバスが来るまでは翔子があつこにいてほしくて必死なようす。
- イ 翔子が話の続きを聞きたがらないくらいに今回の話の出来が悪いことに気づきながらも、なんとか翔子の関心をつなぎとめようとして話を続けているようす。
- ウ 「ずっと大きくならないアスパラガス」が翔子のたとえであることに翔子が気づいて黙り込んでしまわぬよう、考える余裕を与えまいとするようす。
- エ 話している間に翔子がいなくなっていることを予想しながらも、このまま一緒にいたいという気持ちも混じる微妙なようす。
- オ もう会えなくなるかもしれない翔子へのはなむけとして、翔子が楽しみにしていた嘘の話を精一杯に続けようとしているようす。

問9

本文中に出てくる「少女風」について考えられることとして、**適当でないもの**を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「少女風」という風の名前は、姉の存在との関連を感じさせる。

イ 章也のまわりから姉がいなくなろうとも、「少女風」に気づきさえすればその風は章也の助けになる。

ウ ある程度の知識や経験を積まなければ「少女風」には気づくことはできない。

エ 「少女風」を知らなかったがゆえに傘を持ってこなかったことを、章也は後悔こうかいしている。

オ 「少女風」を知らずに章也は雨に降られたが、雨粒をはじめ飛ばしたことは今後の成長を暗示している。



次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昨今、「正しきは人それぞれ」とか「みんなちがってみんないい」といった言葉や、「現代社会では価値観が多様化している」「価値観が違う人とは結局のところわかりあえない」といった言葉が流布しています。このような、「人や文化によって価値観が異なり、それぞれの価値観には優劣がつけられない」という考え方を相対主義といいます。「正しきは人それぞれ」ならまだしも、「絶対正しいことなんてない」とか、「何が正しいかなんて誰にも決められない」といったことさえ主張する人もけっこういます。

こうしたことを主張する人たちは、おそらく多様な他者や他文化を尊重しようと思っているのでしょうか。そういう善意はよいものではありませんが、^①はたして「正しきは人それぞれ」や「みんなちがってみんないい」という主張は、本当に多様な他者を尊重することにつながるのでしょうか。そもそも、「正しさ」を各人が勝手に決めてよいものなのか。それに、人間は本当にそれほど違っているのかも疑問です。

たしかに、価値観の異なる人と接触することがなかったり、異なっても両立できるような価値観の場合には、「正しきは人それぞれ」と言っているても大きな問題は生じません。たとえば、訪ねることも難しい国の人たちがどのような価値観によって生活していても、自分には関係がありません。またたとえば、野球が好きだとサッカーが好きな人は、スポーツのネタでは話が合わないかもしれませんが、好きなスポーツの話さえしなければ仲良くできるでしょう。サッカーが好きなのは間違っていて、すべての人は野球が好きでなければならぬ、なんていうことはありません。

こうした場面では、「人それぞれ」「みんなちがってみんないい」でよいでしょう。A、世の中には、両立しない意見の中から、どうにかして一つに決めなければならない場合があります。たとえば、「日本の経済発展のために原子力発電所が必要だ」という意見と、「事故が起こった場合の被害が大きすぎるので、原子力発電所は廃止すべきだ」という意見とは、両立しません。どちらの意見にももつともな点があるかもしれませんが、日本全体の方針

を決めるときには、どちらか一つを選ばなければなりません。原子力発電所を維持するのであれば、廃止した場合のメリットは捨てなければなりません。②逆もまたしかり。「みんなちがってみんないい」というわけにはいかないのです。

そんなときには、どうすればよいでしょうか。「価値観が違う人とはわかりあえない」のであれば、どうすればよいのでしょうか。

そうした場合、現実の世界では権力を持つ人の考えが通ってしまいます。本来、政治とは、意見や利害が対立したときに妥協点や合意点を見つけたすためのはたらきなのですが、最近、日本でもアメリカでもその他の国々でも、権力者が力任せに自分の考えを実行に移すことが増えています。批判に対してきちんと正面から答えず、単に自分の考えを何度も繰り返し返したり、論点をずらしてはぐらかしたり、権力を振りかざして脅したりします。

そうした態度を批判するつもりで「正しさは人それぞれだ」とか「みんなちがってみんないい」などと主張したら、権力者は大喜びでしょう。B、もしもさまざまな意見が「みんなちがってみんないい」のであれば、つまりさまざまな意見の正しさに差がないとするなら、選択は力任せに行うしかないからです。「絶対正しいことなんてない」とか「何が正しいかなんて誰にも決められない」というのであればなおさらです。決定は正しさにもとづいてではなく、人それぞれの主観的な信念にもとづいて行うしかない。それに納得できない人とは話し合っても無駄だから権力で強制するしかない。こういうことになってしまいます。

C、「正しさは人それぞれ」や「みんなちがってみんないい」といった主張は、多様性を尊重するどころか、異なる見解を、権力者の主観によって力任せに切り捨てることを正当化することにつながってしまうのです。これでは結局、「力こそが正義」という、困った世の中になってしまいます。それは、権力など持たない大多数の人々（おそらく、この本を読んでくれているみなさんの大部分）の意見が無視される社会です。

では、どうしたらよいのでしょうか。

よくある答えは、「科学的に判断すべきだ」ということです。科学は、「客観的に正しい答え」を教えてくれると多くの人は考えています。このように、さまざまな問題について「客観的で正しい答えがある」という考え方を、普遍

主義といえます。探偵マンガの主人公風に言えば、「真実は一つ！」という考え方だといってもよいかもしれません。先ほどの相対主義と反対の意味の言葉です。「価値観が多様化している」と主張する人たちでも、科学については普遍的な考えを持っている人が多いでしょう。「科学は人それぞれ」などという言葉はほとんど聞くことがありません。

そして実際、日本を含めてほとんどの国の政府は、政策を決めるにあたって科学者の意見を聞くための機関や制度を持っています。日本であれば、各省庁の審議会（専門家の委員会）や日本学術会議などです。「日本の経済発展のために原子力発電所は必要なのか」「どれぐらいの確率で事故が起こるのか、事故が起こったらどれぐらいの被害が出るのか」といった問題について、科学者たちは「客観的で正しい答え」を教えてくださいに思えます。

ところが、実は科学は一枚□ではないのです。科学者の中にも、さまざまな立場や説を取っている人がいます。そうした多数の科学者が論争する中で、「より正しそうな答え」を決めていくのが科学なのです。それゆえ、「科学者であればほぼ全員が賛成している答え」ができあがるには時間がかかります。みなさんが中学や高校で習うニュートン物理学は、いまから三〇〇年以上も昔の一七世紀末に提唱されたものです。アインシュタインの相対性理論や量子力学は「現代物理学」と言われますが、提唱されたのは一〇〇年前（二〇世紀初頭）です。現在の物理学では、相対性理論と量子力学を統一する理論が探求されていますが、それについては合意がなされていません。合意がなされていないからこそ、研究が進められているのです。

最先端の研究をしている科学者は、それぞれ自分が正しいと考える仮説を正当化するために、実験をしたり計算をしたりしています。つまり、科学者に「客観的で正しい答え」を聞いても、何十年も前に合意が形成されて研究が終了したことについては教えてくれませんが、まさしく今現在問題になっていることについては、「自分が正しいと考える答え」しか教えてくれないのです。ある意味では、「科学は人それぞれ」なのです。

そこで、たかさんの科学者の中から、自分の意見と一致する立場をとっている科学者だけを集めることが可能になります。東日本大震災で福島第一原発が爆発事故を起こす前までは、日本政府は「原子力推進派」の学者の意見ばかりを聞いていました（最近また、そういう時代に逆行りしつつあるような気がしますが）。アメリカでも、トランプ

大統領（在任二〇一七〜二〇二一）は地球温暖化に懐疑的な学者ばかりを集めて「地球温暖化はウソだ」と主張し、経済活動を優先するために二酸化炭素の排出の規制を緩和しました。

権力を持つ人たちは、もっと直接的に科学者をコントロールすることもできます。現代社会において科学研究の主要な財源は国家予算です。そこで、政府の立場と一致する主張をしている科学者には研究予算を支給し、そうでない科学者には支給しないようにすれば、政府の立場を補強するような研究ばかりが行われることになりかねません。

このように考えてくると、^③科学者であっても、現時点で問題になっているような事柄について、「客観的で正しい答え」を教えてくださいませんか？

この本では、「正しさ」とは何か、それはどのようにして作られていくものなのかを考えます。そうした考察を踏まえて、多様な他者と理解し合うためにはどうすればよいのかについて考えます。ここであらかじめ結論だけ述べておけば、私は、「正しさは人それぞれ」でも「真実は一つ」でもなく、人間の生物学的特性を前提としながら、人間と世界の関係や人間同士の間の関係の中で、いわば共同作業によって「正しさ」というものが作られていくのだと考えています。それゆえ、多様な他者と理解し合うということは、かれらとともに「正しさ」を作っていくということです。

^④これは、「正しさは人それぞれ」とか「みんなちがってみんないい」といったお決まりの簡便な一言を吐けば済んでしまうような安易な道ではありません。これらの言葉は、言ってみれば相手と関わらないで済ますための最後通牒です。みなさんが意見を異にする人と話し合った結果、「結局、わかりあえないな」と思ったときに、このように言うでしょう。「まあ、人それぞれだからね」。対話はここで終了です。

ともに「正しさ」を作っていくということは、そこで終了せずに踏みとどまり、とことん相手と付き合い合うという面倒な作業です。相手の言い分を受け入れて自分の考えを変えなければならぬこともあるでしょう。それでプライドが傷つくかもしれません。しかし、傷つくことを嫌がってはいけません。新たな「正しさ」を知って成長していくことはできません。

最近、「正しさは人それぞれ」と並んで、「どんなことでも感じ方しだい」とか「心を傷つけてはいけない」といった感情尊重の風潮も広まっています。しかし、学び成長するとは、今の自分を否定して、今の自分でないものになるということなのです。これはたいへんに苦しい、ときには心の傷つく作業です。あえていえば、成長するためには傷ついてナンボです。若いみなさんには、傷つくことを恐れずおそに成長の道を進んでほしいと思います（などと言うのは説教くさくて気が引けますが）。

（山口裕之『やまぐちひろゆき』「みんな違ってみんないい」のか?」による）

問1 A C にあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア ところで イ たとえば ウ つまり エ しかし オ なぜなら

問2 線部「一枚□」の□に漢字一字を入れて慣用句をつくる時、最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 板 イ 岩 ウ 上 エ 皮 オ 舌

問3

——線部① 「はたして『正しさは人それぞれ』や『みんなちがってみんないい』という主張は、本当に多様な他者を尊重することにつながるのでしょうか」とありますが、このことについて筆者はどのように考えていますか。本文中から次の a 〽 d にあてはまる言葉を指示された字数で抜き出して入れ、説明を完成させなさい。

「正しさは人それぞれ」「みんなちがってみんないい」という主張は、一見多様性を尊重しているように思えるが、価値観の異なる人の意見の中から、 a 十三字 状況じょうきょうになった場合、実際にはこの主張は通らない。こんな時、例えば、政治の世界では b 七字 を見だみいだした状況じょうきょうでは c 三字 が対話を一方的に避けようとする場面も増えている。だが、その時にこの主張を唱えたとしても、結果的には c の意見を後押しあとおしするという皮肉な状況が生まれ、 c の d 三字 のやり方を国民は選ばざるを得なくなる。したがって、最終的にこの主張が多様性の尊重にはつながらないと筆者は考えている。

問4

——線部② 「逆もまたしかり」とありますが、ここではどのようなことになりますか。本文中の言葉を使って答えなさい。

——線部③「科学者であっても、現時点で問題になっているような事柄について、『客観的で正しい答え』を教えてくれるものではなさそうです」とありますが、なぜですか。次のア～カの中から適当なものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア わたしたちが中学や高校で習うニュートン物理学のようなものはかなり古い考え方なので、有能な科学者であっても現時点の問題にはうまく対応できないから。
- イ 最先端の研究をしている科学者は自分の考える仮説を正当化しようとするため、研究の過程で客観性が曲げられる可能性があるから。
- ウ 多くの科学者が正しい答えだと合意するまでにはかなりの時間を要するため、そのときまでは単なる仮説に過ぎず合意が形成されたと言えないから。
- エ 東日本大震災や福島第一原発の爆発事故ばくはつが起きる前は多くの科学者が原子力の推進派であったにもかかわらず、事故後は急に反対派に転じたから。
- オ 政府がにぎっている国家予算を少しでも多く手に入れたいがために、大多数の科学者が政府の立場を補強する研究を行っているから。
- カ 権力を持つ人たちが自分と考えを同じくする立場の研究者を抱えこみ、自分たちに有利な研究ばかりを推進させる状況を生み出すから。

問6

——線部④「これは、『正しさは人それぞれ』とか『みんなちがってみんないい』といったお決まりの簡便な一言を吐けば済んでしまうような安易な道ではありません」とありますが、どういうことですか。本文中から次の a d にあてはまる言葉を指示された字数で抜き出して入れ、説明を完成させなさい。

「正しさは人それぞれ」とか、「みんなちがってみんないい」という簡便な言葉は、相手との a 二字 を終了させ、互いの理解や歩み寄りをはねつける言葉である。現在はこの言葉を使って、面倒なことから逃げたり、b 四字 を傷つけられるのを避ける傾向にあるが、そのように相手と関わらないで済みますのではなく、相手とじっくり向き合い、自分以外のものとの関係の中で、c 十一字 。そこそが筆者の言う「正しさ」であり、「正しさ」が生み出される過程だと言える。しかし、場合によっては、そのことが d 七字 となるが、結果的には自分を成長させる道となると筆者は考えている。